特集 アイヌ民族・文化を知る

「今」だから知りたい「アイヌ民族・文化」の話

平成 31 年 4 月にアイヌ施策推進法が成立し、今年の 7 月 12 日には、白老町にウポポイ・民族共生象徴空間が開業しました。今年度は町でもアイヌ関連事業が実施されています。

そんな話題の「アイヌ民族・文化」のこと、もっと知りたい、もっと理解したいというテーマで今月号の特集ではアイヌ文化や豊浦とアイヌ民族の関係についての話をお届けします。

そもそも「アイヌ民族」とは？

アイヌ民族は樺太、千島列島、そして日本列島北部周辺、とりわけ北海道の先住民族です。日本語と異なる「アイヌ語」をはじめとした独自の文化を持っています。

「アイヌ」とは、もともとアイヌ語で「人間」を意味する言葉で、自然界すべての物に魂が宿ると考えられ、その存在を「カムイ」(神・精霊)と呼び、それに対する概念としての「人間」という意味で自身のことを「アイヌ」と呼んでいます。それが後に民族名称となりました。

アイヌ文化ってどんな文化？

「アイヌ語」をはじめ、動植物や景観、道具などすべての物にカムイが宿るとされている「精神性」、祭りや家庭での行事などに踊られる「古式舞踊」、独特の「文様」による刺しゅう、木彫りなどの工芸品といった、固有の文化を発展させてきました。

アイヌ民族は狩猟を主として生活しており、海からは魚や貝類のほか、アザラシやオットセイ、山野では季節の野草や木の実、鹿やヒグマなど豊かな恵みを与えてくれる自然に対して、尊敬と恐れを抱き、自然、動物、植物など人間の周りにあるものすべてが「カムイ」(神・精霊)であると考えています。

そして、私たちの目に映っている姿はカムイが人間の住む世界—「アイヌ・モシリ」に滞在しているときの姿であり、カムイは神々の世界—「カムイ・モシリ」とアイヌ・モシリを行き来して、アイヌ民族の生活を支えていると考えています。このように、動物であれば肉や皮、骨などをもたらしてくれたことに感謝して、カムイをカムイ・モシリに送り帰す「送り」の儀式が行われます。この儀式では、酒や食べ物などたくさんのお土産を持たせてカムイの魂を送ることで、再びアイヌ・モシリにやってきて、恩恵をもたらしてくれるよう願いました。

▲アイヌ文様が刺しゅうされた民族衣装
(公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構所蔵)

◀祭りや儀式の際に男性が頭にかぶるサパンペ(豊浦町所蔵)

豊浦のアイヌ民族

アイヌ民族は血縁関係などをもとに、「コタン」(集落)を形成しました。豊浦町にもかつて本町地区や礼文華地区などにコタンが存在したことが、さまざまな資料からわかっています。

明治 11(1878)年、英国人女性旅行家のイザベラ・バードが北海道を訪れ、豊浦町を通過したことが彼女の手記からわかっています。当時、静狩から豊浦、虻田(現・洞爺湖町)を通る主要な交通路であった「礼文華山道」は、「蝦夷三大難所」と呼ばれる非常にけわしい山道のひとつでした。

バードはこの山道を通った際、案内役の乗った馬から落ちた荷によって怪我を負い、礼文華にあった「レブンゲコタン」に 3 日ほど滞在しています。

バードの手記によれば、レブンゲコタンには 30 戸ほどの家があったことや、彼女をもてなしたアイヌ民族に対して好感をもったことなどが記されています。